

2025年度上野千鶴子基金助成金最終報告書（HP掲載用）

1. 助成対象事業	「SDGs の諸課題解決に向けた活動」
2. 事業の区分	「一般プロジェクト」（活動）
3. 氏名/団体名	松本みどり
4. 事業名	バングラデシュ発ドキュメンタリー「Tales of Banishanta（邦題：沈みゆく売春島で生きる）」の日本語版制作事業
5. 事業実施期間	2025年9月～2025年12月
6. リンク	N/A

7. 事業の目的

本事業はバングラデシュ出身のドキュメンタリー監督 Md Shahadat Hossain 氏の作品「Tales of Banishanta」の日本語版制作を目指したものである。ホサイン監督は、このバングラデシュの「売春島」とも呼ばれるバニシャンタ島に5年間通い、島で性を売って暮らす女性たちの声に耳を傾けてきた。美しい映像と対比する形で語られる女性たちの過酷な人生が浮かび上がることが、この作品の特徴となっている。このドキュメンタリーを視聴することは、日本人にとってもジェンダーと貧困、若者の孤立、人身売買の問題を考える貴重な機会となる。

8. 実施内容

英語字幕（原語：ベンガル語）で制作されたドキュメンタリーの日本語字幕制作作業

9. 事業の成果と自己評価

ドキュメンタリー映画「バニシャンタ物語～沈みゆく売春島に生きる」（邦題）（68分／日本語字幕）を完成させた。当初は英語字幕からの翻訳による日本語字幕制作を予定していたが、ベンガル語の専門家である渡辺一弘氏の協力を得て、ベンガル語に基づいたチェックを行うことができた。内容がセンシティブであるだけに、より安心かつ完成度の高い日本語字幕となった。完成後、11月25日-12月10日のUN WOMEN主催の「UNiTE 女性に対する暴力撤廃キャンペーン（16 Days of Activism against Gender-Based Violence Campaign）」期間中、JICA（国際協力機構）においてキャンペーン・イベントの一環として上映することが決定、最終日の12月10日にJICA本部にて上映会が開催された。上映後のトークセッションには、監督のシャハダット・ホサインもオンラインで参加し、質疑応答に応じた。

【観客の感想】

- 2025年7月の開発学会での英語版の上映会でも見たが、日本語になり、より深く内容を理解できた。
- 非常に心動かされた。一言で感想を伝えにくい。私たちは、GBVの課題ということをグループで見てしまいがち。こうした映画をみると一人一人の姿が見え、このような女性たちのために変化をもたらさないといけないと感じた。
- このようなことが21世紀の現在に合法的に行われていることに大変驚き、心が痛んだ。自分は何ができるのかすぐに答えは出ないが、問題意識をもって生活したいと思う。

- 一度でも婚前に男性と関係を持ったと誤解されだけで結婚が難しくなるようなムスリムの国で、少女のころから、本人に選択の余地もなく、一方的にこのような境遇に置かれてきた女性たちを思うと、心を痛めずにはいられない。
- シャハダット監督の行動により、バニシャンタで生きる人々の存在を世界に知ってもらうことは大変意義のあることであり、この映画によって、バニシャンタで暮らす人々一人ひとりの生活が良くなることにつながることを願わずにはいられない。
- 心を打つドキュメンタリー作品であった。非常に重いテーマに対し、映像の美しさ、また被写体の女性たちの（表面はそのようにふるまっているのだと思うが）明るさが対象的だった。監督は長い時間をかけて彼女たちと親交を深め、心のうちを明かすことを許すまでの信頼関係を築いたのだと、よくわかった。
- 多くの女性は人身売買でこの島に連れてこられ、逃げ場のない中、必死に生きていくしかない、やりきれなさを感じる。性産業は無くならないと思うが、貧しさから来る人身売買をなくすことが私たちに取り組めることと思う。
- この職業を続けざるを得ない彼女たちのような人々への偏見も、世の中から減らしていくれば、と感じる。
- 気候変動対策に携わる者として、島の浸食や豪雨による被害も心配だが、彼女たちが望む「普通の生活」と安全な土地へ移れることを切に願ってやまない。
- 上映前に、映画についての背景と意義に関する説明があったため、スムーズに映画の世界に入っていくことができた。シャハダット監督に心より敬意を表する。
- 30年前ボランティアとして2年間、バングラデシュ西部で500例の女子中高生を対象に性にまつわる調査を実施し、思春期教育に携わった経験を持つ。こんなに月日が流れている（ジェンダーにかかわるプロジェクトなど多々実施されている筈だが）のに、30年経てもおそらく根本的に現状は何も変わっていないのだろうと感じさせられた衝撃のドキュメンタリーであった。
- 彼女たちが12、13歳という若さで経験した現実、そしてそうした壮絶な過去を経験しながらも、逞しく生きている彼女たちの姿に、言葉にならない衝撃を受けた。自分だったら、自分の知り合いの子だったらと思うと、胸が締められ、こんなことは絶対に起きてはいけないことと強く感じた。
- 実際、こういったことが起きている事実に対して、我々は決して目を背けず、知るべき фактであると強く思った。そういう意味でこの映画の意義の高さをとても感じた。
- 映像も素晴らしい、リアルで、彼女たちが傍で訴えている感覚さえ覚えるものであった。

10. 成果物

- * 映像データ（リンク）
- * 日本語字幕制作台本／サブタイトル原稿（データ）
- * 上映：2025年12月10日 JICA本部にて上映
- * イベント：上映後のトークセッション